『伊勢物語』とその享受——歌論・歌学書・歌合

本田恵美

はじめに

『六百番歌合』冬上、一三番、枯野についての俊成による著名な判詞「源氏見ざる歌詠みは遺恨事也」は遍く知られている。それでは「歌詠み」である俊成自身の詠作はどうだったのだろうか。

『長明無名抄』俊成自讃歌事には[注1]、俊恵が「御詠ノ中ニハイヅレヲカスグレタリトオボス。人ハヨソニテヤウ〳〵ニ定侍レド、ソレヲバモチヰ侍ベカラズ。マサシクウケタマハラムト思」と尋ねたところ、俊成は『伊勢物語』一二三段歌を踏まえた「夕されば野辺の秋風身にしみてうづら鳴くなり深草の里」を「身ニトリテノオモテ歌」つまり、上作としていたことが語られている。

また、同様に『千五百番歌合』一三四番、春二、判者権大納言忠良による俊成卿女歌「つれづれのまさるながめはいたづらにはるのものとてふればなりけり」についての判詞「右伊勢物語の歌ども思ひいでられて、すがたもよろしく侍り」や『同』一二〇五番、恋二、判者顕昭による公経卿歌「かくしつつうき身きえなばありし夜のゆめもはかなみあはれとを見よ」についての判詞「左歌は伊勢物語の、ねぬる夜のゆめをはかなみまどろめばと侍る歌のこと葉をおもはれたるにや、あはれにきこえ侍り」など、『伊勢物語』を踏まえた詠作が賞賛されている例があるが、同時代に物語を踏まえた詠作はどのように評価されていたのだろうか。

本稿では、『伊勢物語』が歌論・歌学書・歌合でどのような評価を受け、どのように捉えられていたのかということを歌人の流派や物語享受のあり方を視野に入れながら分析し考察を加えたい。

一　『伊勢物語』に対する評価

一二世紀末から一三世紀初期にかけての歌論・歌学書・歌合の判詞は、『伊勢物語』を「物語」として評価

する立場と『伊勢物語』の「和歌」についての論や和歌と関連づけて論じる立場のおよそ二通りに分類できる。先ずはその評価を概観しておきたい。『袖中抄』第四には『伊勢物語』一二段の和歌にふれて次のようにある。

春日野事は伊勢物語の歌必しも皆業平歌にあらざる歟。古今読人不レ知歌の中に業平が歌ならぬ歌おほく相交れり。然者此つまもこもれりの歌は、古歌に春日野と侍けるを業平造二伊勢物語一之時下二向坂東一之由注付日事有二便宜一之故に改書二武蔵一歟。古今は用二本説字義一て春日野と書歟。

ここでは業平が物語内容に合わせて便宜的に和歌を改作したとするが、『袋草子』（上巻）の『伊勢物語』は「業平朝臣所為也」、『和歌色葉』の「在原中将の伊勢物語　在次滋春が大和物語　…」、『代集』の「在中将が伊勢物語」という記述をみても業平を『伊勢物語』作者と捉える作者論の立場からの言及が多く、当時業平作者説が隆盛を極めていたことが窺われる。また、『古来風体抄』（初撰本）は、「いせものがたりはまことにある事をもかけり」とするものの「さしもなき事をもをかしきさまにかきなし、ものをもいはせ、うたをもよませたる事もあれば、ふるきうたにあひたることのあるとき、そのうたをいはせても侍らん」と作り物語性を認めている。[注2]

次に、和歌論的な立場からは、『袋草子』（上巻）は「伊勢物語の和歌二百五十首〈但本々不審〉」と指摘する。現行の定家本の歌数は二〇九首、広本系の和歌を合わせても二三四首ほどなので、当時は歌数の多い伝本も流布していたものと推察される。『和歌初学抄』では次掲出のように伊勢物語中の代表的な和歌の歌句を抄出し和歌を学ぶ人のための手引書としており、当時どのような表現が好んで用いられていたかということが見て取れる。[注3]

かぎりしられず　けなましものを　むさしあぶみさすがにかけて思　てをゝりてへにける年をかぞふれば　とをとてよつはへにけるを　つゆやまがふと人をばえしもわすれねば　秋の夜のちよをひとよになずらへて　つゝゐづゝゐづゝにかけし妹がたけふりわけがみもかたすぎぬ　きみこむといひしよごとに　あらたまのとしのみとせ　あづさゆみまゆみつきゆみ　そでになみだぞさわぐらし　いへばえに思へばむねのさわがれて　いほりおほきしでのたをさ　かち人　神のいさむる　いはにおふてふみるからに　こゝろはなぎぬ　ちひろあるたけ　まくらとてくさひきむすぶ　みをしわけねば　なだのしほやき　いづれたかけむ　あふな〳〵おもひはすべしおぼつかなみのけふのながめや

また、『長明無名抄』は「古人云、仮名ニ物カク事ハ、歌序ハ古今ノカナノ序ヲ本トス。日記ハオホカヾミノ事ザマニナラフ。和歌ノ詞ハ伊勢物語並後撰ノ歌ノ詞ヲマネブ。物語ハ源氏ニスギタル物ナシ。ミナコレラヲオモハヘテカクベキナリ」と、物語では『源氏物語』を挙げるのに対して和歌の詞では『伊勢物語』『後撰集』を推している。『詠歌大概』[注4]も「常観二念古歌之景気一可レ染レ心。殊可二見習一者古今、伊勢物語、後撰、拾遺、三十六人集之内殊上手歌可レ懸レ心。〈人丸、貫之、忠岑、伊勢、小町等之類。〉」と、『古今和歌集』に次いで『伊勢物語』を和歌を学ぶ人の必読書として捉えている。

以上、『伊勢物語』は物語という作為性を有するものの『古今和歌集』や『後撰和歌集』と並べられる和歌優位の正典と捉えられていることが看取できる。[注5]

二　和歌詠作の実際―『六百番歌合』の場合

それでは、和歌詠作の現場はどのようなものであったのだろうか。歌論歌学書が台頭してくる時代、リアルタイムの伊勢取りが歌合わせ判詞などから窺える。中でも『六百番歌合』は批評の多様性や衆議判詞、顕昭の難陳において注目を集めている。[注6]以下、紙幅の都合により全ての例を挙げることはできないが、具体的に『六百番歌合』における伊勢取りを確認しておきたい。[注7]

Ⅰ　伊勢取りの指摘が無く判に影響が見られない例

①春中／三十番（春曙）

119さやかなる秋にもまさるあはれかな月影かすむ有明の空　　有家朝臣
左持

右　寂　蓮

120今はとてたのむの雁もうちわびぬ朧月夜の明ぼのの空

右方申云、左歌、甘心。左方申云、右歌、特甘心。判云、左の「月影かすむ有明の空」、右の「朧月夜の明ぼのの空」、共に優美にして、亦難二決申一。猶、持に侍べきにや。

②春下／六番（遅日）

131斧の柄をかくてや人はくたしけん山路おぼゆる春の空かな　　兼宗朝臣
左持

右　家　隆

132春の日は灘の塩屋のあま人もいとまありてやくらしわぶらん

左右共、申二不レ悪之由一。判云、両首共に悪しからぬ由、方の人〳〵申云々。持にこそは侍なれ。

③春下／廿四番（蛙）

左持　　兼宗朝臣

167もろ声にいたくな鳴きそさもこそはうき沼の池のかはづ成とも

右　　隆信朝臣

168夜とともに浪の下にて鳴くかはづ何ゆへ深き恨みなるらん

左右各申下無二別事一之由上。判云、左右の「蛙」、「うきぬの池」「深き恨み」などいへる、心詞同じさまに見え侍り。持とすべくや。

④恋五／五番（老恋）

左持　　兼宗朝臣

849言はぬ間は思ふ心も九十九髪さは偽りの夢や見てまし

右　　信定

850恋初めし心の色に積む年は我黒髪に現れにけり

右申云、近比、「夢を見るとも九十九髪」といふ歌、侍しにや。左申云、「積む年」、耳に立つ。判云、両首の髪の歌、左、「近比の歌」と右方人申たる、いづれの比のことにか侍らん。撰集などの歌の外は、必ずしも避り敢ふべからざることなり。況や、さまで似ずは常の事なるべし。右の「積む年」も、又、さまで「耳に立つ」とも覚え侍らず、如何。但、「我が黒髪に現れにけり」とばかりは、白髪としも覚えずや侍らん。又、左の「さは偽りの」といへる姿も、殊不レ被二庶幾一にや。持などにや。

①は『伊勢物語』一〇段歌「みよしののたのむの雁もひたぶるに君が方にぞよると鳴くなる」「わが方によると鳴くなるみよしののたのむの雁をいつか忘れむ」を、②は八七段歌「蘆の屋の灘のしほ焼きいとまなみつげの小櫛もささず来にけり」（『古今和歌六帖』第五、「櫛」に類歌あり）を、③は二七段歌「みなくちにわれや見ゆらむかはづさへ水の下にてもろ声に鳴く」、一〇八段歌「風吹けばとはに浪こす岩なれやわが衣手のかはくときなき」「宵ごとにかはづのあまた鳴く田には水こそまされ雨は降らねど」の各句の一部と地の文、及び類似表現を用いて構成されているが、伊勢取りが判にまで影響を及ぼしているとは思われない。④は六三段「百年に一年たらぬつくも髪われを恋ふらしおもかげに見ゆ」及び地の文の「まことならぬ夢がたり」を踏まえているが同じく判には影響を与えていない。

Ⅱ　『伊勢物語』歌についての言及があり、伊勢取りが判に影響していると思われる例

⑤夏上／九番（夏草）

左

197夏草の野島が崎の朝露を分てぞ来つる萩の葉の摺り

右勝　　家　隆

198茂き野と夏もなりゆく深草の里はうづらの鳴かぬばかりぞ

右申云、左、無「指難」。左申云、「夏も」といへる、慥なる証拠のあるに似たり。何事にか。陳云、「うづらとなりて鳴きおらん」といひたれば、秋と聞えたり。それによりて、「夏も」と詠みたる也。判云、左歌、終りの句に、「萩の葉の摺り」といふならば、初めには、たゞ野島が崎を分けつる由ばかりにてありぬべきを、初に「夏草の」と置ける、重畳して聞ゆ。右歌、「茂き野と」など置ける姿、宜しきに似たり。以「右為」勝。

⑤では一二三段歌「年を経てすみこし里をいでていなばいとど深草野とやなりなむ」「野とならばうづらとなりて鳴きをらむかりにだにやは君は来ざらむ」が踏まえられており、右の方人が和歌を引いて説明している。『伊勢物語』の秋を承けて夏とし、「野とならば」を「茂き野」と表現した「姿」が認められ、その結果、勝になっている。

Ⅲ『伊勢物語』歌についての言及はあるが、伊勢取り　が判に影響しているとは思われない例

⑥秋中／十六番（秋田）

左持　　兼宗朝臣

391秋田守る賤が庵に宿借らんさても此世は過ぬべき身ぞ

右　　家　隆

392深からぬ山田の庵も秋はなを心のはては見つべかりけり

右申云、左歌、意趣まさなくや。左申云、右歌、悪しからず。判云、左歌、か様の心にては優にこそ侍めれ。伊勢物語などに「落穂拾はん」などいへるは、おかしくこそ侍れ。「まさなし」といはん、中〳〵なる事也。右歌も、心ありては見え侍り。「深からぬ」といへるや、いかゞと覚え侍れど、持などにや。

⑦恋一廿一番（見恋）

左　　兼宗朝臣

641見ずもあらず見もせぬ中の故にだに人は思ひのつかぬ物かは

右勝　　信　定

642見ればけになか〳〵にとてうとくとも猶面影の離るべきかは

右方申云、左歌、無「所」可「難、又非「珍。左方申云、

右歌、上五七五、聞きにくゝや。判云、左は伊勢物語を思へるなるべし。右は、「見ればけに」と言へるを、方人「聞きにくゝや」と申云々。「けに」など言へるは、歌の常の詞也。但、歌の心は、いと聞きわかれぬ様にこそ侍れど、歌姿勝れるにや侍らん。

⑧恋十／十五番（寄海人恋）

左　　顕昭

1169藻塩やく海人のまくかたならねども恋のそめきもいとなかりけり

右勝　　家隆

1170思ひにはたぐひなるべき伊勢の海人も人を恨みぬ袖ぞ濡れける

右申云、「海人のまくかた」は「まてかた」といふ説あり。これもいかやうに定められたるにか。陳云、「まくかた」と存て詠ずるなり。後撰歌、「て」と「く」と通へども、「いとまなみ」といふ、塩焼くことに叶へり。万葉・伊勢物語等にも、「塩焼くいとまなし」と詠めり。又、斎宮女御歌に「まくかたに海人の掻き積む藻塩草」とあるも、「て」には叶はず。（中略）右歌、殊なる事なしといへども、左、「恋のそめきもいとなかりけり」、雖レ為二古詞一優ならず聞ゆ。「まくかた」、証拠あらず。以レ右為レ勝。

⑥では『伊勢物語』五八段歌「荒れにけりあはれいく世の宿なれや住みけむ人の訪れもせぬ」「むぐら生ひて荒れたる宿のうれたきはかりにも鬼のすだくなりけり」「うちわびておち穂ひろふと聞かませばわれも田づらにゆかましものを」が踏まえられており「おかしくこそ侍れ」と賞賛されているが、結果は持である。[注8]　⑦は九九段歌「見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮さむ」を踏まえている。⑧は八七段歌「蘆の屋の灘のしほ焼きいとまなみつげの小櫛もささず来にけり」を踏まえているものの「まくかた」の証拠不十分で負になっている。

Ⅳ　伊勢取りがプラス評価されている例

⑨恋六／十九番（寄雨恋）

左　　顕昭

937下とをる涙に袖も朽ちはてて着るかひもなき雨衣哉

右勝　　中宮権大夫

938恋ゆへに身を知る雨の年を経て心のうちにかき曇るらむ

右申云、「下とをる」、南殿（日大本…何故）と覚ゆ。左申云、「身を知る雨」、此歌の面には、何事

に身を知りけるにやと覚ほゆ。判云、左の「下とをる」、此「雨衣」、塩屋などの事によそへんと思けるを忘れて、海辺の由もなければ、「あま衣」もたゞ尼などの衣にこそ侍めれ。右の「身を知る雨」は、「恋故に」といへり。其故しるくこそは侍めれ。右、勝侍なん。

⑩恋七／廿六番（寄橋恋）

左勝　　定家朝臣

1011人心緒絶えの橋に立かへり木の葉降りしく秋の通ひ路

右　　経家卿

1012思はずに緒絶えの橋と成ぬれどなを人知れず恋わたる

哉

右方申云、「木の葉降りしく」、何事にか。左方申云、右歌、常事也。判云、左右共に「緒絶えの橋」、優なるべし。左の「木の葉降りしく」、伊勢物語を思へるにや。右方人、空覚にや。右も歌姿は優なるを、「人知れず」や、歌の心に違ひたらん。猶、左の「木葉降りしく秋の通ひ路」、宜しかるべし。勝と申べくや。

⑪恋十／十四番（寄海人恋）

左勝　　兼宗朝臣

1167我恋はあまのさかてを打ち返し思ときてや世をも恨みん

右　　経家卿

1168衣手はしほたるれどもみるめをばかづかぬ海人となりにける哉

右申云、「あまのさかて」、有二異説等一事也。尚ひとへに海人に定め詠める、如何。左申云、右歌、無二可レ申事一。判云、左、「あまのさかて」、殊に庶幾すべき事にはあらねど、海人に詠めらんにをきては、何難かあらんや。近来人々出二異説一云々。無二其理一歟。愚老こそ往昔に詠みて侍しか。それを難ずる由に侍べし。伊勢物語の他、殊に証拠なかるべし。但、歌合の時、「あまのさかて」、宜しくも聞えざるべし。右、衣手はしほたれて、みるめはかづかざらん海人とならん事、其要なくや。これは誠の海人にはあらざるべし。左、「さかて」は優ならざれ共、海人也。勝とすべし。

⑨は『伊勢物語』一〇七段歌「かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身をしる雨はふりぞまされる」を踏まえており、その「身を知る雨」の理由を「恋」と解いた点がプラス評価されている。⑩は右方には伊勢取りが理解されなかったものの、九六段歌「秋かけていひしながらもあらなくに木の葉ふりしくえにこそありけれ」を踏まえている

ことが俊成によって指摘されプラス評価されて勝を得ている。⑪は同じく九六段の地の文「かの男は、天の逆手を打ちてなむのろひをるなる」を踏まえている。「あまのさかて」自体は『伊勢物語』以外に証拠がなくマイナス評価だが、「誠の海人」であることが勝評価に繋がっている。

Ⅴ　伊勢取りがマイナス評価されている例

⑫冬上／廿四番（霙）

左持　　顕昭

527宇津の山夕越え来れば霙降り袖ほしかねつ哀この旅

右　　経家卿

528今日も又交野の御野に霙してかはく間もなき狩衣かな

右申云、左歌、無指難。左申云、右歌、古めかし。判云、左、「袖ほしかねつ哀れこの旅」などいへる、寂びては聞え侍を、「宇津の山」こそ、拠り所なくや侍らん。伊勢物語などに、「宇津の山辺のうつゝにも」などいへる所にも、霙降れりとも見えず。その故なきならば、霙降りぬべからん山も、「哀れこの旅」といはん所も多く侍らんかし。「宇津の山」、故無くては、さまで拠り所なくや侍らん。右は、「交野の御野」も、かの「濡れぬ宿貸す人しなければ」といへる歌も霰にて、はた鷹狩も今少しおかしく聞ゆ。左右共に、「宇津の山」「交野の御野」も、いづくにてもありぬべく聞ゆ。同程のことと申べし。

⑬恋五／一番　老恋

左　　季経卿

841昔我振分髪を見てしより恋に乱て老いぞしにける

右勝　　隆信朝臣

842色に染む心は同じ昔にて人のつらさに老を知るかな

右申云、「振分髪」、俄なり。又、幼恋をひき出たる、如何。左申云、右、無指難。判云、左歌、「振分髪」の乱れ、余り久しくや。右歌、げにさる事と聞ゆ。以右可為勝。

⑭恋九／二十四番（寄衣恋）

左勝　　季経卿

1127からあひの八入の衣色深くなどあながちにつらき心ぞ

右　　隆信朝臣

1128衣〳〵にうつりし色はあだなれど心ぞ深き忍ぶもぢずり

右申云、「からあひの八入」といふ、もしくれなゐの事にや。然者かちには如何。陳云、確かにくれなゐと見えたる事なし。からあひの深き色なれば、かちといはん、何の咎かあらん。左申云、右歌、心は

さよと聞ゆれど、言ひあらはされず。「心ぞ深き忍ぶもぢずり」の続きも、打ち合はずや。判云、左、初めに「からあひの」と置けるぞ、優にしも聞えざれど、くれなゐには有べからず。かちといへらん、不レ及レ難歟。右、初より「心ぞ深き」といへるまで、「忍ぶもぢずり」には叶はず聞ゆ。終句の「忍ぶもぢずり」、俄に出で来たる様成べし。からあひの勝べきにこそ侍めれ。

⑫は『伊勢物語』九段を踏まえているが、物語に見られない「霙」を持ち出したことでマイナス評価を受けている。これについては、『六百番陳状』に「今歌は、彼山の心細きかたをみぞれに引よせて侍れば、此難侍べからず」云々という顕昭の長文の難陳がある。⑬は『伊勢物語』二三段歌「くらべこしふりわけ髪も肩すぎぬ君ならずしてたれかあぐべき」が踏まえられているが「老恋」に「幼恋」を持ち出すという奇を衒った詠作が「俄」であるとしてマイナス評価を受け、⑭も『伊勢物語』初段歌「みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑに乱れそめにしわれならなくに」を踏まえているものの「俄に出で来たる様成べし」と唐突な詠みぶりにより負とされている。

以上、伊勢取りを大まかに分類し見てきたが、踏まえられていた段は、1・9・10・12・19・23・27・58・63・87・96・99・107・112・114・122・123の全一七段であり、「幼恋」「老恋」など『伊勢物語』に象徴的な題が与えられることで、各段を想起する場合が多い。しかし、所謂有名章段以外にも短小な段や無名な段も取られており、そこからは、使い古された著名段を避けようとする引用の高度化が図られていることが窺える。また、伊勢取りは歌句だけでなく、物語の地の文にまで及んでいる。中世の歌人たちは『伊勢物語』の和歌だけでなく地の文やその物語内容まで深く読み込み『伊勢物語』を自分のものにしていたと言える。

【歌人ごとの『伊勢物語』享受一覧】

定家	寄橋恋（96）
有家	雉（12）
女房	雉（12）
寂蓮	春曙（10）　夜恋（23）　老恋（114）　幼恋（23）
家隆	遅日（87）　夏草（123）　夜恋（19）　幼恋（122）
兼宗	蛙（27）　秋田（58）　見恋（99）　老恋（63）　寄海人恋（96）
隆信	蛙（108）　幼恋（23）　寄衣恋（1）
顕昭	霙（9）　幼恋（23）　寄海人恋（87）
季経	老恋（23）　寄煙恋（112）
信定	幼恋（23）　寄煙恋（112）　寄河恋（107）
中宮権大夫	寄雨恋（107）
経家	寄煙恋（112）

※（　）内は『伊勢物語』の段数

次に歌人ごとの内訳を見ると、六条家よりも御子左家関係者の方が若干数が多いが、伊勢取りは個人の嗜好による点が大きく、流派による偏りはあまり見られない。

歌合判詞に見られる指摘等を参照しても『源氏物語』との比較においては詠作の際に『伊勢物語』を取ることの方が多かったように思われる。その理由は『伊勢物語』は短編で暗誦しやすかったということもあるだろう。『源氏物語』のような長編になると方人や判者が物語内容を網羅しているという保証はない。それに加えて「幼恋」や「老恋」等で想起される『源氏物語』の巻々や他の物語がある場合でも、それが『伊勢物語』を基にして創作されている場合も少なくないからである。

また単に句を引くような引歌表現を越えた段階の韻律や物語の表現世界を吸収した上での詠作が目立つことも特徴であったと言える。

三　中世歌人の『伊勢物語』享受 ― 寂蓮の場合

それでは、御子左家関係者のうち寂蓮の伊勢取りの例を具体的に取り上げ、どのような詠作をしているのかということを見ておきたい。次に、『寂蓮法師集』中の『伊勢物語』享受歌を掲出する。

60涙河身もうきぬべきねざめかなはかなき夢の名残ばかりに

むかし業平朝臣、河内国たかやすの郡にかよひける比、奥つ白波心にかけける故郷は、所の人中将のかき内となん申伝へていまに侍るを、中の春の十日あまり、諸共にみにまかりたりける人のもとより

72をる花のにほひのこれる故郷の心にしみし名残をぞ思ふ

返し

73いにしへの名残もかなし立田山よはに思ひし宿のけしきは

三輪の社にまうでてしるしの杉に書付けける

74(348)三輪の山あはれいく世に成りぬらん杉の梢にやどをまかせて

137かち人のぬれぬためしもさかづきの底にかくべき絵にこそ有りけれ

すゑの秋あづまの道にて手越はつくらと云ふ所を

154越えてこしうつの山ぢにはふつたもけふやしぐれに色は付くらん

あづまのかたにおなじ旅なりける人の妻なる女の、身まかりにけるをききて、なげきければつかはしける

161ことはでおもひしよりは都どり聞きて悔しき音をや鳴くらん
返し
162都鳥ききてくやしき夢の内におどろかすにぞ音はなかれける
宮城野
178みやぎののこはぎが露を分行けば色こそかはれしのぶもぢずり
柳掃水
271竜田がはきしの青柳行く水にかずかくものはしづえなりけり
津の国のあし屋といふ所にしほゆあみける時、ぬのびきの滝見にまかりて、月の出づるまでありける
343山かぜに雲のしがらみよわからじ月さへおつる布曳のたき
出雲の大社へまゐりける道、美作国に懐綱が侍りける、かくと聞きてなどともなはざりしなどいひつかはして
351いにしへをおもひいづもの甲斐もなくへだてけるかな
その八重垣を
返し
352おもひあればへだつる雲もなかりけりつまもこもれり
出雲八重垣
ゐなみ野をまかりけるに野中のし水にてかれ飯たべて
353くむ人はまだいにしへに成りぬらん野中のし水おもひ忘るな

全体的に見て『伊勢物語』に出てくる地名に関わる詠作が多いが、二七一番歌について具体的に検討したい。寂蓮が『伊勢物語』の故地や歌枕を旅したこと、また当該歌と『伊勢物語』五〇段との関連は半田公平によって指摘されているものの、それ以上の詳しい分析はなされていない。(注9) 次に『伊勢物語』五〇段を掲げる。

むかし、男ありけり。うらむる人をうらみて、
鳥の子を十づつ十はかさぬとも思はぬひとを思ふものかは
といへりければ、
朝露は消えのこりてもありぬべしたれかこの世をたのみはつべき
また、男、
吹く風に去年の桜は散らずともあなたのみがたひとの心は
また、女、返し、

ゆく水に数かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり

また、男、

ゆく水とすぐるよはひと散る花といづれ待てて

ふ言を聞くらむ

あだくらべ、かたみにしける男女の、忍び歩きしけることなるべし。

ここでは、「鳥の子を十づつ十はかさぬ」「朝露は消えのこりてもありぬべし」「吹く風に去年の桜は散らず」と実現不可能な物を喩としてあげ、恋愛や人の心の頼みがたさを表出する和歌のやりとりが続く。それに続く女の返歌が「ゆく水に数かくよりもはかなきは」である。当該歌の「ゆく水に数かく」という表現は本来、『万葉集』巻一一、二四三三、寄物陳思「水上（みずのうへに）　如二数書一（かづかくごとき）　吾命（わがいのち）　妹相（いもにあはむと）　受日鶴鴨（うけひつるかも）」が、水の上に数を書くことに喩えて吾命のはかなさを訴えるように、『涅槃経』巻一「是身無常、念々不住。猶如二雷光暴水幻炎一、亦如レ画レ水。随画随合。」を踏まえたものであったと思われる。その無常観を感じさせるような素材を用いながらも「はかない物」＝「命」を、「はかない物」＝「人の心」と巧みに読み変えて『伊勢物語』は男女のあだくらべの物語を描いている。その趣向を真似たのが中世歌人による伊勢取りの手法ではなかったか。以下、寂蓮による『伊勢物語』を用いた詠作の方法を検討してみたい。

寂蓮の二七一番歌は「柳掃水」という題（詞書）からも窺えるように、「竜田がは」の「きしの青柳」が水を「掃く」様を詠んだものである。ところが、周知の通り竜田川は紅葉の名所であるため、詠み込まれる和歌の九割近くが紅葉についての詠である。[注10]『伊勢物語』一〇六段（『古今和歌集』巻五、秋歌下、二九四、業平朝臣）にも「ちはやぶる神代も聞かず龍田河からくれなゐに水くくるとは」の著名な和歌がある。

先ず、『伊勢物語』が「行く水にかずかく」→「はかない命」を「行く水にかずかく」→「はかない男女の心」としたのに対して、寂蓮は、「行く水にかずかくもの」→「青柳の下枝」と、「行く水にかずかく」行為に目を向けるのではなく、景物を象る方向に発想を転換することで、『伊勢物語』の方法を踏襲したのではなかったか。さらに、竜田川は紅葉の名所であり、それは赤という色に象徴されるが、その「秋」とは対照的な「春」の青柳の下枝という緑の絵画的な詠を現出させたところに寂蓮の手腕があったように思われる。「行く水にかずかくもの」を「青柳の下枝」と解いたことは、『伊勢物語』六九段「かち人の渡れど濡れぬえにしあれば」のかち人が

江を渡っても濡れない理由を「さかづきの底にかくべき絵」と解いた一三七番歌の謎解きについても同様の手法と言える。

以上、中世歌人による『伊勢物語』享受の一端を見てきたが、彼らは『伊勢物語』の方法を踏襲しながらも新たな和歌表現を模索し、獲得していった。特に寂蓮の場合について言えば、『伊勢物語』の世界からダイナミックに発想を転換させることで、新たな詠作を果たしていたものと思われる。

【注】

(1)『井蛙抄』にも同様の記載がある。

(2) 時代は下るが、『聞書全集』に「物語とは伊勢、大和、源氏、狭衣、うつぼ、竹とり赫奕姫物語等なり」と物語の筆頭に掲げられ、『古風小言』には「およそ物語てふ書は、児女の昔物がたりの心にて、作りごとなり。まづ伊勢物語は全体虚誕なり」とするものの「伊勢・源氏、文章絶妙、後世の及ぶ所にあらず」と高く評価されている(『にひまなび』『歌道大意』にも)。『大ぬさ』は「これら皆古人の諺とせるにや。其外竹取をはじめ、伊勢・源氏の類ひは、もとより打出でたる作り語りならんには、いよ〳〵見るにたらずとせんか」と酷評する。

(3) 松平文庫本では配列が異なり、「つみもなき人をうけふは」を追補している。

(4)『井蛙抄』にも同様の記載がある。

(5) 時代は下るが、和歌論的な立場からは『了俊一子伝』の「一、三代集の歌の外に、つねに可二披見一抄物事。三十六人の家集等、伊勢物語、清少納言枕草子、源氏物語等也」や『清巌茶話』の「一、本歌にとる事草子には源氏のことはいふに及ばず、古物語とる也。住吉、正三位、竹取、伊勢物語をば、みな歌をも詞をもとる也」と必読書に掲げるものや『詞林拾葉』の「恋の歌は源氏、伊勢物語にて、其の儘の趣向よまるゝなり。是にて恋の情たりぬべし。又四季のうたにも、月花のたぐひは恋の情にて大かたよむなり」と恋歌として評価するもの、『歌意考』(草稿本)の「…かぐら歌・さいばりなど(ママ)、古き時のものなれば、いとよし。土佐日記も常に見よ。いせ・やまと・おちくぼ・うつぼなどのものがたりもみよ。いせはこと葉の書ざまこそよによろしけれ。やまとはこと葉もいとおとりつ。(略)伊勢物語は古き人の歌をもて詞をかへ、又みづからもよみて作れりと見ゆれど、歌はいとこそわろきが多けれ。そが中にかの業平朝臣のはことばをかへて作れども、

猶ことのさまことにて、もとよくあかき玉はきずつくれども光ことなるが如し」との評価がある（『縣居歌道教訓』にも）。『歌学提要』は「返し歌はよくかけ歌の意を解きえて、さてをかしくも悲しくも、其節其所の心々を尽すべし。古今集・伊勢物語などを見て考ふべし」と返歌の参考として推奨する。

（6）久保田淳「『六百番歌合』の和歌史的意義」（『新日本古典文学大系　六百番歌合』解説一九九八年）は『六百番歌合』について「数ある歌合の中でも抜群に面白い歌合である」とし、その理由として次の三点を掲げている。一歌合を構成する一二〇〇首の和歌の多様・多彩さ。二評定の場における左右の難陳を要約した「申状」を通して窺える、その議論の面白さ。三判者俊成が自身でそれぞれの和歌を吟味した上で、難陳を受けて難陳の当否をも検討し、目前にはいないと思われる左右の方人と問答する形で書き記した判詞の、変幻自在な行文の面白さと、その内容の歌論的な質の高さ。

（7）伊勢取りの認定にあたっては和歌の他出及び類歌など他の歌集等も参照した。

（8）ここで右方が陳述する「意趣まさなくや」の「意趣」は「作り物語の意趣」として『伊勢物語』の注釈書にも多用される関連語であることを付加しておきたい。

（9）半田公平『寂蓮法師全歌集とその研究』（一九七五年、笠間書院）、『寂蓮の研究』（一九九六年、勉誠社）『寂蓮』（二〇〇三年、勉誠出版）など。

（10）その他「竜田川」の「たつ」と「名が立つ」ことを掛詞にする場合が多いが、「竜田川」の「柳」を詠んだ例はほとんどない。

※本文引用は、歌論・歌学書は『日本歌学大系』（一巻～一〇巻、別巻一～別巻一〇巻）、『六百番歌合』『六百番陳状』は新日本古典文学大系、『伊勢物語』『万葉集』は新編日本古典文学全集、その他の和歌の引用は『新編国歌大観』による。『六百番歌合』は、岩波文庫も適宜参照した。一部表記を改めた箇所もある。

※本稿は、阿部泰郎先生主催の名古屋大学文学研究科比較人文学講座・先端研究特別演習、公開研究発表（二〇〇五年一二月二四日、於名古屋大学文系総合館七階カンファレンスホール）において同題で口頭発表した原稿をもとに加筆訂正を加えたものである。席上、ご教授をいただいた方々に御礼を申し上げる。

（ほんだ・えみ／名古屋大学大学院博士課程後期）